

加西の文人

序

古い昔から播磨鴨の国の中枢地として開け、文化の由緒久しい加西の地には、その伝統をうけついで祖先からの業績は、光芒誠に輝かしいものがあります。ところが、これらの貴重なものも星移り、時の流れと共に亡失の運命に追い込まれてしまうことについて、痛惜の情が高まって来ておりました。

ようやく、昭和五十二年頃から、加西市美術家協会の議に上り、さらに加西市文化連盟がこれを継承して「加西の文化人」という標題のもとにこれらの集大成の業がすすめられました。

これによって、先人の光芒の跡をたずね、郷土の先哲、賢人の業績をつまびらかにして、加西市民としてこれを共有のものとし、誇るに足るものを改めて再確認し、さらにそれを後代に伝え、その伝承の上に新しい郷土文化の発展をこいねがう市民の願望が叶えられるならば、誠に有難くうれしく思います。

ところが、既に所々、方々に散逸し、その所在もさだかでない資料を百方さがし求めてこれを確認し、集録していくことの困難さを思う時、それを克服して完成の域にすすめられた方々の御努力に対して、深甚の敬意と感謝をささげると共に、資料の提供など、惜しみない御協力をいただいた方々に対しても深く感謝を申し上げなければならぬと思います。

願わくば、これを契機として、加西文化の伝統と由来を知り、先人の業績に敬仰の誠をささげると共に、新しい加西文化創造のエネルギーが澎湃として湧出することをこいねがいたいと思います。

加西の文化人

井上 貢

大正十四年（一九二五）姫路師範学校二部卒業後、加西郡富合小学校に勤務、続いて同師範専攻科卒業後各地へ転職、芦屋市立精道小学校奉職中、足の障害のため退職した。

教職中に画を、伊藤継郎、伊藤慶之助画伯等に学び、春陽会に所属した。昭和十四年より、新興美術展に連続三回入選したのをはじめ、昭和十六年には県展にも入選した。大平洋戦争末期北条町に疎開、昭和二十五年に加西子供美術クラブを発足させ指導した。また同年、郡内の同好者を集め、加西文化連盟をつくり、加西地区教育委員会連絡協議会後援のもとに、写真・絵画・書道・彫刻・華道・茶道・服飾・刀剣・俳句・音楽・謡曲・義太夫・播州音頭等々の総合文化祭を開催した。以後歿年まで同文化祭の継続に尽力し、加西における文化運動の基礎を築いた。

その他加西郡身体障害者連合会の初代会長に推され、またブラジルとの間で児童画交換展の開催、全国児童画コンクールにおいて北条小学校児童作品が連続文部大臣賞を受けるなどの成果を収めた。

そのようなことから昭和三十四年第九回全国身体障害者福祉大会で厚生大臣表彰を受け
 両陛下に拝謁の栄を得た。またその受賞を記念して高松宮殿下に作品「野趣」を献上、ま
 た作品「ひまわり」は県に買い上げられた。

生涯を通じ、意欲的に文化事業、および身体障害者のために貢献し多くの業績をのこし
 た。

昭和三十六年（一九六一）八月二十四日歿。享年五十六才。

（図30・31・32・33参照）

尾 芝 寸 松

嘉永四年（一八五一）に北条の地に生まれた。俗称を四郎兵衛といい、寸松と号した。
 儒学を大野乙山に、画を田能村直入に学び、多くの秀作をのこしている。

大正二年（一九一三）三月一日歿。享年六十三才。

（図21・22・23参照）

大 野 乙 山

加西郡北条に生まれた。通称を宇四郎、諱を芳綱（な）といい、字を子尚と称した。幼いころ
 より学問を好み、大阪に出て、寺西易堂、中井竹山に儒学を学んだ。学業成り、のち故郷

北条に帰り、子弟の教育に専念した。また、木崎得玄を師に、表千家流の茶道を学んだ。その子、三男順は、画家田能村直入の嗣子「小斎」である。墓誌は藤沢南岳の撰文になる。明治二十二年（一八八九）九月十二日歿。享年七十九才。

（図98参照）

児島尚善

延享二年（一七四五）、加西郡北条の地に生まれた。名を恭、字は頤齋、竹隱と号し、医師のかたわら儒学に精通した。

幼少のころ父に別れ、志を立てて京都の後藤良山の門に入る。その人となりについては伴蒿蹊の著「続・奇人伝」の一節に、

「凡そ、諸生三年にあらざれば、家方を伝ふる事を許さざるに、播磨の人、児島尚善といへるが、半生につゞめて日々怠らず学ばん事を乞ひしに、三度に及びて聴かざれば、力なく国に帰らんとするに臨み、其の母を養はんが為、在京久しうし難き由を聞き、始めて入門を許し云々……」

とあることによつてもそのあらましを窺うことができる。遊学中、母の書状をことごとく保存し、特に親に孝養を尽くし、母歿後も大切に扱っていたが、自分の死後の散逸を憂い、二百余通の書状を北条町五百羅漢（羅漢寺）の境内に埋め「慈法尼手簡塚」として碑

を建てた。

伴蒿蹊の著書「孝慈録」は尚善の孝状を記したものである。尚善は常に人に善行をすすめ、また衛生思想の普及につとめた。彼の著書には、「産科母子草」「さとし草」がある。北条町笠屋、神明神社横の「酒見社」なる碑の文字は尚善の筆跡である。

文化十二年（一八一五）四月十一日歿。享年七十一才。

（図96参照）

三枝 夏 畦

名は保熙、字は子典といい、俗称を定六と称した。別に雪岩とも号した。幼いころから画を好み、のちに大阪の中井竹山、岡田半江、矢野雪叟等に学び、文人画家として知られた。

安政二年（一八五五）六十才で歿した。墓誌は友人大野乙山の撰文である。

三枝 水之進

名は嚴、字は子莊といい、号を惟馨と称した。北条町、高瀬清兵衛の三男で三枝氏の養子となった。詩に巧みで、また能書家でもあったという。かつて田安候の命により「興民俱

楽」(民とともに楽しむ)の四字を奉ったことがある。

明治八年(一八七五)九十三才で歿した。

高瀬北潜

加西郡北条町の農家に生まれ、生家は大庄屋をつとめ、「庵の下」(現 御旅町)にあつたといわれている。本名を潜といい、通称督五郎、号を芙蓉山人、または北潜と称した。

病弱であつたため、四十余才で家業を弟に譲り、もともと好きであつた画業に志し、京都に出て、松村景文に師事し、さらに江戸の谷文晁にも学んだ。ついで大阪に帰り岡田半江と親しく交わり、画家として大成した。年長ずるに従つて、長年の病弱も回復し、明治二十一年(一八八八)八十一才の長寿をまっとうした。茶道、歌道にも秀でていたと伝えられる。

(図52参照)

高橋郁夫

名を正雄といい、郁夫と号した。明治四十四年(一九一一)加西郡北条町(現 北条町栄町)に生まれた。指物職を業とし、箏曲の道にも達していた。元来凝り性で、そのことは

本業の上にも、尺八の道にもあらわれ、虚無僧（こむそう）姿で各地を回ったこともあるという。

昭和二十五年に自由律俳句の荻原井泉水主宰、「層雲」に入り、また同会加西支部「北風の会」創立同人として活躍した。その個性的作風は、広く人の認めるところであったという。平素は、言葉かすの少ない人だったが、酒が入ると俄然生気を帯び、そのような際に秀作が生まれたとのエピソードもある。

昭和四十三年（一九六八）歿。享年五十八才。

（図82参照）

田中 稔

明治二十八年（一八九五）五月、横須賀市に生まれた。早稲田大学商学部卒業後、医学に志し、日本医科大学に入学、卒業後、医師として東大病院に勤務し、のち、東芝川崎工場附属病院長に転じた。同病院在任中学位をとり、医学博士となる。

昭和三十三年、加西郡北条町、三洋電機北条製造所診療所長として赴任、従業員の健康管理に当る一方、長年にわたり、技を磨いた日本画で、当時、その部門に弱かった「北条町美術展」の招待出品に応募するなど、大いに加西美術界の振興に貢献した。以後、多忙な診療所長の業務のかたわら、北条チャータール会など、絵画グループの中心的メンバーとし



て活躍した。

氏は、日展常任理事、西山英雄画伯の影響を受けたといわれ、作品「西方寺の庭」は、昭和二十九年の日展に入選している。

昭和四十九年（一九七四）六月十四日、北条町西高室で歿した。享年七十九才。

（図 34・35・36・37 参照）

田能村 小 齋

大野乙山（儒者）の三男として北条に生まれた。名は順、字を慎、通称順之助、号を小齋と称した。南画家、田能村直入の養子となり、義父直入を師に技を磨き、次第に画家としての名声をあげていった。

小齋は、義父直入、また息子小篁とともに、父子三代にわたり、それぞれがその一門を率い、たびたび北条の地に遊び、数かずの作品をのこすなど、郷土の地に与えた文化的影響は大きい。住吉神社拝殿に、小齋筆の「楠公父子桜井駅別之図」の絵馬が奉納されている。

明治四十二年（一九〇九）京都で歿した。

（図 18・19・20・48 参照）

徳岡 天然

本名を左門、諱を良といい、字は真輔、天然と号した。文化九年（一八一二）一月十日医師徳岡元有の二男として、多可郡西脇に生まれた。兄弟四名すべて医家である。

はじめ、多可郡比延の広田玄昌に学び、のち、大阪の斎藤方策に入門した。天保十年（一八三九）加東郡三草藩主、丹羽家の要請により江戸に遊学して、将軍抱医師でもあり、シーボルト門人でもあった伊藤玄朴に蘭学と医学を学び、帰郷後、北条町福吉において開業した。当時の記録に、「是時蘭術末行、人以為奇異不信」とあるが、「君確然不顧、効直顕」とある。嘉永六年（一八五三）、当地方ではじめて種痘を実施した。天然の実施した種痘記録である、「種痘人名録」は、わが国医学史上の貴重文献といわれている。安政五年（一八五八）の江戸種痘所認可より遡ること五年前である。洋学とともに、儒学にも志し、詩集ものこしている。

安政六年（一八五九）十一月八日歿。享年四十八才。北条天神岡に葬られた。墓誌は郷友の儒者、大野乙山の筆になる。

（図97・98参照）

畑 中 露 洲



名を長治、号を露洲といい、明治四十年（一九〇七）に、加西郡北条町田町に生まれた。小学校卒業後、北条町役場に勤務し、のち北条町内の印刷所に転職した。

大正十三年（一九二四）二月、俳句の向上を目ざす加西在住の青年たち数名が、沈滞した地元俳壇を革新しようと立上がり、子規系で長谷川零余子主宰の「枯野」の支部として「北風の会」を起こしたとき、露洲はその發起人の一人として参加した。当時十七才の若さであつたが、明晰な頭脳と、新鮮な感覚の作風は、多くの人に注目され、その将来が望まれていたが、大成を待たず、昭和八年（一九三三）二十六才で夭逝した。（図78・79参照）

林 光 治

高峰神社宮司、林茂光の長男として明治十四年（一八八一）十一月六日、加西郡富田村畑（現 畑町）で生まれた。明治三十六年（一九〇三）県立御影師範学校を卒業、尼崎、伊丹、加西郡富田小学校に勤務したが、のち大正九年（一九二〇）志を立てて国学院大学高等師範部に入學、卒業後兵庫県立第三中学校（現 長田高校）および、小野中学校（現 小野高校）教諭となり国文、漢学を教授した。その間、県社住吉神社宮司に補せられ、高峰神

社の宮司も兼任した。

生来趣味が広く、漢学、書道、短歌に造詣深く、秀作を残している。また独自の刀筆技法を研究して多くの巧技をのこした。

昭和十七年（一九四二）三月二十一日、自動車事故により急逝した。享年六十二才。

（図68参照）

山田 松 琴

名を滝治といい、松琴と号した。文芸作品には、秋津太郎のペンネームも使ったようである。明治十年（一八七七）北条に生まれた。

小学校卒業後、大阪文楽でしばらく修業。のち、京都日日新聞、名古屋新聞、北海タイムス等に小説を連載していたが、東京で病にかかり、昭和二年帰郷した。北条町駅前に住んで、神戸新聞に連載小説「悲恋勝鬨陣」「酒見の森」「城山」等を執筆するかたわら、俳偕の道にも親しみ、帰郷の少し前に創立された正岡子規系の「北風社」が氏を迎え入れ、松琴邸を会場に例会を開き、若者六・七名が集って夜遅くまで俳句論・文学論をたたかわせていたという。大の愛煙家で、句会の席では、火鉢にみるみる吸い殻の林が出来たという。松琴の句風は、当時の文筆家共通の「秋声会」調だった。

昭和の初年、加西郡当局の要請によって、苦心の末「加西郡誌」の編さんを完成したが、

急に病いが進み、昭和六年（一九三二）死去した。享年五十四才。

（図76・77参照）

安積花樵

加西郡剣坂村（現 加西市西剣坂町）の医師、嘉武の長男として、延享元年（一七四四）に生まれた。俗称を青平、また嘉甫ともいい、俳号を花樵と称した。

加古川の俳人、松岡青羅の門人で、医業や、文武の道にも通じ、四十才のころには、その名が広く知られるようになっていたといわれる。五十才にいたり、世を逃れて、法華山一乗寺に隠棲（いんせい）し、俳偕の道にはげんだ。そして、芭蕉の正風を慕いその奥義をきわめた。

わが影よ我にもいへ秋の暮

法華山一乗寺に、右の句碑が建てられており、他に、寛政五年（一七九三）の俳書「道の燈可芸」に

小夜しぐれ軒の柳の枯るる音

という句の記載があり、他方、

虫の音も流れて草の月夜かな

の句を記した短冊も残っている。

享和三年（一八〇三）八月十六日歿。享年五十九才。

（図84・85・86参照）

安 積 桂 園



文政十年（一八二七）八月四日、加西郡西劍坂村（現 加西市西劍坂町）に生まれた。通称量平、諱は啓、字を子発、号を桂園、晩年は桂翁とも号した。代々医師の家に生まれ、長じて姫路藩校「仁寿山校」、ついで備前の「閑谷校」に学んだ。のち、岡山の難波包節、大阪の後藤松陰、緒方洪庵に入門、漢学および、蘭学医学を習得し名医とうたわれた。

性格は沈毅寡黙で辺幅を飾らず、人に接しては温和であったが、一面、気節壮麗で、安政、文久年間、海防の必要を説き、自から武器を考案し、姫路藩の家老、河合氏に献じたこととがあるという。

明治三年（一八七〇）十月十六日歿、享年四十四才。法華山一乗寺に、亀山雲平撰、寺西易堂書の頌徳碑が建てられている。

（図72参照）

安 藤 峻 涛

明治九年（一八七六）大阪に生まれ、同地で幼時を過ごした。本名は甚六。峻涛と号した。明治三十年（一八九七）二十一才の時、中国北京、雲南省等に留学すること五年、漢学の

勉学に励んだ。帰国後神戸市に住み、安峻涛の号で多くの門弟たちに書道を教えた。のち加西郡賀茂村剣坂に定住し、号を安藤峻涛と改め、書家として活動、時に郡内の僧に書の指導も行ったといわれる。

北条町羅漢寺、同出雲大社、飾磨郡前之庄町雪彦神社など、加西市内はもとより、播磨各地に作品を多くのこしている。晩年にいたり、号を峻涛真逸と改めた。

昭和八年（一九三三）同地で歿した。享年五十九才。

（図65・67参照）

岩田真教

明治十三年（一八八〇）養父郡関宮町に生まれ、宍粟郡宇原、西願寺住持。のち招かれて、加西郡下里村上野田（現 上野田町）、瑞龍山正願寺（真宗）住職となった。

寺務のかたわら、十八才より彫刻を始め、次第に天性の才をあらわし近郷の注目をひくようになった。長じて玉翠と号した。のち、次第に芸域を拡げ、絵画、書道、特に、木彫工芸品に傾倒し多くの作品をのこしている。中でも同寺本堂の内・外陣仕切りの欄間二面（各1段×2段）をはじめ、茶箆筒、茶器、盆など秀作が多い。五十才当時の作品が最も覇気に富んでいる。七十才になり絵画に専念。仏画をよくし、絹本着色「如意輪観音像」画軸（同寺寺宝）「寒山拾得図」「十六羅漢図」等数多く制作し、その殆どは壇家に所蔵

されている。また和裁にも秀で、自分の着用する法衣などはすべて手製のものを使用したという。

昭和三十七年（一九六二）十一月十五日歿。享年八十三才。

（図27・28・29参照）

大島 満堂

明治三十一年（一八九八）一月十八日、加西郡賀茂村東剣坂（現 東剣坂町）妙巖寺（曹洞宗）第十二世、大島恵朴の二男として生まれた。大正五年（一九一六）曹洞宗立名古屋第三中学校卒業。最乗寺、杉本道山師につき修業し昭和四年に妙巖寺住職として就任した。

昭和四十六年、宗務庁より権大教師に任命され、また、大本山永平寺より地方副監院を拝命、その間、若年より学習した詩文を通じて、永平寺第七十三世熊沢泰禪禪師の知遇を得て示寂まで親交が深かった。僧職にあつては、地方の教化につとめ、自坊において「仏心会」を創始して、心経講座、坐禪指導を行う一方、仏教会長、保護司会長、青少年協議会委員等をつとめ、勲六等瑞宝章、のじぎく賞を受けた。

昭和五十一年（一九七六）二月十八日歿す。享年八十才。

（図64参照）

尾上圭二

明治三十二年（一八九九）七月二十日、神崎郡市川町甘地、中野伊七郎の子として生まれた。大正四年、姫路中学校（旧制）一年生在学中、請われて、加西郡下里村西笠原（現西笠原町）尾上徳太郎方へ入籍。山口高校（旧制）を経て、大正十五年、京都大学医学部卒業。昭和三年十二月、高知赤十字病院眼科医長として勤務、同六年五月退職し、姫路市元塩町において眼科医院を開業した。

そのころより「能楽」を始め、京都、観世流、杉浦義郎師に師事し、薰陶を受けた。芸技大いにすすみ、京都市岡崎、観世能楽堂においてその舞技を披露したこともしばしばあり、希代の妙技で識者を魅了したという。また、同じころより、加古川市尾上町、樋口尾山師について書を、姫路市、内藤健一画伯に洋画を習い、数かずの作品を制作し、姫路市公会堂で個展を開催したこともある。

昭和五十二年（一九七七）二月二十二日歿。享年七十九才。

（図42・43参照）

成龍齋 一如

祝融山多聞寺（曹洞宗、加西市尾崎町）第十代住職。華道容真流の開祖。成龍齋一如と

号した。旧富田村吉野の生まれ、生年不詳。幼時に多聞寺に入り僧となった。

生花の造詣深く、未生流から新しい一派を創始した。容真流と称し、御室御所からその創始者として、免許状を下附されたのは、天保十一年（一八四〇）である。また書画も巧みで、殊に隸書は著名であったという。容真流創始の年「千代の香」という図集を、その翌々年、天保十三年（一八四二）には「萬歳楽」という刊本を発行した。弟子も多く、播州一円におよび、東・西剣坂、その他に、その流派は受け継がれた。

多聞寺の障子の腰板八枚に、淡彩と水墨の「童子遊戯図」「花島画」「草花図」の遺作品がのこっている。

文久三年（一八六三）歿し、成龍斎一間法眼があとを継承した。

（図93参照）

中安 政右衛門

天保八年（一八三七）三月十九日、加西郡市場村（現 北条町北条）に生まれ、明治三年（一八七〇）十二月二十日加西郡東剣坂村中安武右衛門の養子として入籍した。本職は表具師であったが、生業器用な性格で、彫刻、絵画、塗物等美術工芸品から料理、生花等に至るまで多芸を極め、姫路の「山づくり」など、いわゆる「造りもの」が特に有名であったという。

通称を常助、晩年常正といったが、生花では一機斎活用、絵画は米山と号した。特に生花は容真流の宗匠として弟子は近郷に多かつたという。彫刻、絵画のうち、仏画、仏像、絵馬、花鳥画、金具工芸品等の遺作が多く、「器用人」の名をほしいまみにした。

生涯清貧に甘んじ、明治三十八年（一九〇五）五月七日七十七才で没した。

辞世　ともしびの　消えぬさまより六の角　広く調べてゆくぞたのしき

（図63参照）

古 家 実 三

明治二十三年（一八九〇）三月十八日、加西郡下里村坂本（現 坂本町）に生まれ、明治四十四年より同地で古本屋を開業した。以後、奈良、神戸で古書店を経営するかたわら、古美術研究に傾倒。その間、労働運動、反戦運動を行った。

昭和十九年（一九四四）三月帰郷し、以来郷土研究に没頭。この年、現、国重文「古法華石仏」を発見し、このことを昭和二十六年十月「下里広報」に発表した。

昭和三十一年（一九五六）八月、加西郷土研究会設立発起人の一人となり、同会発足以来加西郷土史の研究に尽力。同会会誌「播磨郷土研究」第一号発刊以来、生前十一号まで編集・発行するとともに、没年まで同会運営に寄与した。とりわけ、古文化財や古文書研

究に精通し、後進の指導に尽くすなど、加西郷土研究会不可欠の重鎮として貢献した。

昭和四十一年（一九六六）十二月二十六日、七十六才で没した。

（図 94・95 参照）

岩 根 玄 苗

明治二十六年（一八九三）四月十五日、京都府天田郡友淵、山内家の六男として生まれた。字を六水、また禿生ともいい、号を靈峰玄苗と称した。

明治三十五年（一九〇二）十才の時、氷上郡竹田村、石像寺、岩根仙苗師のもとに弟子入りし、大正四年、早稲田大学文学部予科修了、続いて同八年、駒沢大学卒業、その後兵役に服し陸軍少尉に任官。除隊後、大正十年、氷上郡、宗福寺の住職となったが、翌十一年、加西郡九会村田原（現 加西市田原町）見性寺（曹洞宗）の住職に迎えられた。以後寺運の興隆に尽くすかたわら、曹洞宗務布教師として兵庫県内をはじめ、遠く台湾にまで布教活動に奔走し、多くの足跡をのこした。

戦後、県立北条農業高等学校等に勤務のかたわら、趣味で始めた仏画「達磨大師像」を多く制作し、その描くところの墨画像は、檀家や知己に少なからず遺存している。

見性寺住職をつとめること五十年、本山より「権大教師」の位階を与えられ、昭和四十

七年（一九七二）八月二十六日、享年八十才で歿した。

（図60参照）

菅野 繁谷

加西郡繁昌村（現 加西市繁昌町）の出身で、本名は忠広、またの名を慶藏とも称した。生年、伝記ともに不明だが、いつのころか大阪に出て、日本画を習得し、繁昌の一字をとって繁谷と号した。古老の話では、大阪で「十人衆」との名声があつたという。のち美囊郡吉川谷大沢（現美囊郡吉川町）に移住し、時の庄屋山田清兵衛の援助を受けたらしく、同家（現存）や、三木市口吉川町、蓮花寺などに遺作品が多くのことっている。花鳥画、人物画を得意とし、吉川町山田家にのこる襖四枚に描かれた「千羽鶴の図」蓮花寺庫裡の大襖十二枚の「花鳥画」は特に有名である。

年老いて、出身地繁昌に帰つたらしく、同所共同墓地に自然石の墓碑がある。それにはつぎのような狂歌が記されている。

繁谷と云て世界の人々が 花の障を大井志て

跡を繁昌菅野可那 繁昌出て花の盛りを

大阪で 花の樂火を本のはん志やう

（図13・14・15・16・17参照）

別府 春風子



本名、角太郎、俳号を春風子と称した。明治十九年（一八八六）二月十一日、加西郡富合村別府（現 加西市別府町）に生まれた。生家はもと裕福であったようだが、角太郎は青年時代、早稲田大学の講義録で苦学したという。成人して天理教会に入り、教会師として活躍したが、一方、易学にも詳しくあったという。

昭和二十八年、当時、新しく起った自由律俳句に惹かれ「北風の会」に入って精進した。同じ自由律俳句の会「層雲」の同人で、小豆島で無欲、無一物の生涯を送った尾崎放哉に傾倒、つぎのような句を残している。

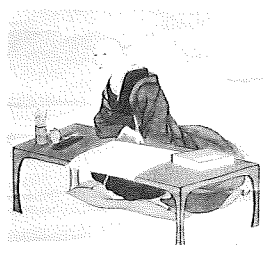
八方五欲の中へ芍薬の真実赤い芽をふく

底の抜けた暮らしがまた暮れになる。

物持ちの中へなんにもない手を広げる

彼の生涯もまた無欲清貧に甘んじ、死の枕へには、茶碗一つ、箸二本のみだったという。

昭和四十七年（一九七二）三月二日歿。享年八十六才。



三宅剛吉

明治三十一年（一八九八）十二月、加東郡河合村（現 小野市）三枝竜二郎の三男として生まれた。神戸高等学校（現 神戸大学）卒業後三菱銀行に勤めたが、翌年、小野中学校（旧制）英語教師として赴任した。大正十一年（一九二二）十一月、請われて、加西郡九会村中野（現 加西市中野町）三宅家に入籍した。

家業の酒造業を経営するかたわら、そのころより芸術写真制作に没頭し、十数年間にわたり数かずの名作を生み出した。とりわけ三十二、三才ごろの風景描写作品が特にすぐれ各地で賞を得ている。生来、趣味多く、壮年にいたって始めた菊作りもまた、近隣はもとより、阪神方面にしばしば出品し、賞賛されたと伝えられる。老年にいたり、中国、日本の經典の研究を始め、人生観や真理の追求について思索にふけり、自己の完成にうむことがなかった。

昭和五十一年十二月二十九日歿。享年八十才。

（図 38・39・40・41 参照）

青山雄子

宝暦四年（一七五四）加西郡殿原村（現 殿原町）、青山久俊の二女として生まれた。

幼いころから文学を好み、書も巧みで、「教えられずに和歌を詠む才能があつた」とさえ伝えられる。歌道を、姫路の黒坂元静や、芝山持豊に師事し、のち、村田春門の門に入って、ますますその道を究めた。作歌の数、実に十萬首にのぼるといふ。老年にいたつて、名声とみに上がり、「播磨三女」の一人と賛えられ、その名は四辺に響いた。ために当時の領主、清水郷から養老米を下賜されたといふ。父の久俊は、男子に縁薄く、雄子に養子直俊を迎えて家を継がせた。

歌集「海の歌」「旅の歌」「梅の歌」「夕の歌」「恋の歌百首」など、二十集が、加西市殿原町、青山一俊氏宅にのこされている。天保十年（一八三九）八月二十日、八十六才で歿した。

（図87・88参照）

奥川 總 観

嘉永四年（一八五二）一月十四日、美囊郡中吉川村、奥川善治の子として生まれ、十二才で同郡石峰寺竹林院、観辨師の門下に入った。十五才の時、明石藩の儒者梁田邦恕や、金本善郷等について漢学を学び、のち高野山に登り、宝檀師から宗学を修めた。続いて高野山講習所に入り佛典を研究した。ついで、奥山寺の住職に就任してからは、宗内割管理の任に當つた。その後、宗會議員、連合會議員や学頭になり、加西各宗協議会長等を歴任

した。

師は、書に造詣深く、提山の号で多くの書をのこしている。一方青少年の教育にも尽力し、明治四十四年「青嶺学館」を創設して中等補習教育のため貢献した。その功績により、知事よりたびたび賞を受け、また、地方の有志団体からも、師の恩徳を偲んで、彰徳碑が奥山寺に建てられている。昭和元年（一九二六）四月二十三日歿。享年七十三才。

（図71参照）

高見良貞

加西郡富家村（現 加西市乙和泉町）の医家、高見淡堂の子として生まれた。名前を恭、字を子肅といい、玉洞と号した。幼少のころ、京都に遊学し、山脇東門について医学を、柴栗山に儒学を学んだ。のち、九州に行き、肥後の村井琴山、筑前の亀井道載について修業した。業を終え故郷に帰り医家として開業するかたわら、習得した儒学を近郷の子弟に伝えた。姫路藩校「仁寿山校」医学寮教授をつとめたこともある。詩文の秀作が遺存している。

生前、岡田半江、野之口隆正等の文人墨客と親交があったという。嘉永三年（一八五〇）八月歿。享年不明。

高見友輔

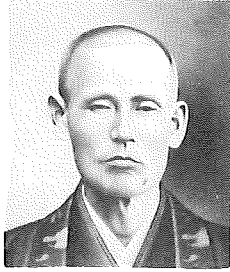
高見矩孝の子として、宝暦九年（一七五九）、加西郡富家村（現 加西市乙和泉町）に生まれた。名を長といい、号を友輔、また蘭室とも称した。

二十才の時、京都に出て青蓮院殿に奉仕し、石田法眼円山主水に絵を習い、画家として大成した。その作品は、枯淡な味の人物画が多く、出生地の甲・乙和泉町など近郷に遺存している。文政十一年（一八二八）五月二十八日、享年七十才で歿した。（図44・45参照）

芝田弘淳

明治十三年（一八八〇）三月三十日、美囊郡上淡河村東畑の旧家に生まれ、書をよくし、詩文に秀で、松軒と号した。幼少のころ、加西郡多加野村国正、奥山寺の住職奥川総観大和尚の室に入り剃髪した。のち播磨中学校卒業後、大阪泊園書院に入学、藤沢南岳翁に師事し漢学を専攻した。

明治三十四年（一九〇一）兵役を課せられ、近衛師団に入隊、日露戦役に従軍し、戦功により功七級金鷄勲章を拝受、歩兵曹長に任ぜられた。除隊後、法兄弘観僧正の後継とし





て、加西に帰り多加野村西野々の明光寺の任職となり、古義真言宗監正委員をはじめ、加西郡和教会会長などの要職をつとめた。

昭和二十七年（一九五二）十月二十五日歿。享年七十二才。

（図70参照）

竹内 玄玄一

寛保二年（一七四二）、加西郡富家村（現 加西市乙和泉町）の通称「いずみや」といわれる家に生まれた。

幼いころ失明したが、加古川の俳人吉田白馬が「発（俳）句は心眼でつくるべきもの」と諭し、「心にて見るが見るなり月の色」と詠んで力づけたところ、彼大いに感激して、「暑さ忘るる風におどろく」との脇句をつけたので、かえって白馬が、その才能に驚き入ったという。それを機縁に白馬の門人となり、加古郡別府村の俳人、滝瓢水や、姫路の岡田十磨等と交友を結ぶ一方、大阪やその周辺を徘徊すること十数年、のち江戸に出て深草に住み同地の俳人竹庵吾山に学び、馬場存義、交買明、谷口楼川などと交遊した。

明和年中、京橋西鍛冶町に移り、俳号を竹窓と称して、多くの名句を残している。

白魚も洗へば水のにぎりけり

野小屋へも御幸の沙汰や白牡丹

人ばかり死ぬとはおかし花の春

彼の稿本をもとにその子、青青が完成した刊本「俳家奇人談」は文化十三年（一八一六）の発刊で、同じく青青が、十六年後の天保三年（一八三二）に刊行した「続・俳家奇人談」とともに、俳界の珍書とされ、加西市段下町竹内安太郎氏宅に所蔵されている。

文化元年（一八〇四）歿。享年六十三才。

（図89・90参照）

高見 淡 堂

宝暦六年（一七五六）、加西郡富家村（現 加西市和泉町）に生まれ、そこで育った。諱は之全、字は子徳、嵩峰と号した。

高見家は代々医家として続いていたが、淡堂は壮年に至って学問にも志し、京都に出て大川鴻の門人となった。学大いに進み、当時師をしのぐ英才としての誉れが高かったという。業成つてのち、故郷和泉へ帰り、医業に従事するかたわら、京都の儒者皆川淇園や、大阪の中井竹山と親交があったという。

文化六年（一八〇九）十一月、五十四才で歿した。



辻 栄二

寛政元年（一七八九）加西郡中富村（現 中富町）に生まれた。通称を栄二、諱は恵迪、松窓と号した。同家は代々庄屋をつとめ、先代栄二（同家は世襲制）は村政によく尽くしたので苗字帯刀を許されていたという。

栄二の墓碑に「為人簡重、好読書接物恭遜処事周詳うんぬん……」と記されているごとく、特に読書に親しみ、居宅に一室を設けて「長嘯館」と名づけ、大阪の儒者中井竹山から贈られた同文の扁額は今も同家に引継がれている。また、名士との交友も多く、栄二が生前記した「交友録」には、頼山陽、中井竹山、梁川星巖、広瀬旭荘、大国隆正等多数の名が見える。

天保六年（一八三五）十月七日歿。享年四十七才。

辻 靖

文政七年（一八二四）加西郡中富村（現 中富町）庄屋辻栄二の子として生まれた。字は子節、竹里と号した。通称を栄二郎と呼んだが、その子もまた栄二郎を襲名している。

青年のころ、大阪の懐徳院に入り、中井竹山に師事した。そのころ、父栄二（号松窓）



は、居宅に一室をつくり「長嘯館」と称した。靖が帰郷の際、師竹山より贈られた同文の扁額を持ち帰ったといわれる。帰郷してのち、読書、詩作に励み、詩集「風雅集」上下二巻を著わし、その著書は版本とともに同家の現当主、辻良彦氏宅に伝わっている。靖は、先代と同じく村のために尽力したので、永世苗字帯刀を許されていたという。

慶応元年（一八六五）十月十五日歿。享年五十二才。

（図91・92参照）

時里遊圃

明治三十七年（一九〇四）、加西郡西在田村下若井（現 下若井町）に生まれた。本名は甚一、遊圃と号した。

大正十三年（一九二四）二月、加西郡内に俳句の新しい気風が起り、子規系、長谷川零余子の主宰する「枯野」加西支部としてつくられた「北風社」に若干十九才で参加。以後、常に先頭に立って活躍した。のち大阪に出て、同地より「大阪慢歩」なる紀行文を、当時姫路から発行されていた俳誌「シラサギ」に連載したこともある。

戦後、昭和二十五年一月、「北風社」の解消によって新しい気運が生まれ、荻原井泉水主宰、自由律俳句「層雲」の加西支部として、「北風の会」が創立されたので参加した。

さらに、昭和四十二年八月、三枝重峰らによる俳句の現代詩化を主眼にした“一行詩”運

動（会名「颯」）に参加して俳句の革新に尽力した。句集「北風」第一、第二集をのこしている。また業績や作品は、播磨文化人名鑑に詳しい。

昭和四十七年（一九七二）七月十六日歿。享年七十才。

（図83参照）

中山 玄 航

文政十年（一八二七）十月十日、加西郡多加野村池上（現 加西市池上町）、菅田嘉兵衛の長男として生まれたが、中山忠能の猶子となったので中山姓を名乗った。九才の時、比叡山に登り、十一才で得度、嘉永五年（一八五二）、二十六才で明徳院の住職となった。

明治維新当時、仏教の興廢に関し奔走し、ついで数十年間にわたり、滋賀県下教導職取締、また、延暦寺執行管長代理、一宗総会議員等々を歴任し、明治三十二年（一八九九）天台座主となった。その間の著名なる業績はつぎのようなものである。明治十二年、貫主と管長の区別を明らかにしたこと。「宗制寺法」という書物を編さんしたこと。延暦寺「法華会」を復興したこと。毘沙門堂の山林を復旧したことなどであるが、特に珍しい事績として、明治二十六年七月、英国海軍大佐フォンデスの懇請によって「円頓菩薩大戒」の位を授けたということが伝わっている。

大正十三年（一九二四）歿。享年九十八才。

（図69参照）

広田華州

本名を卓爾といい、華州と号した。明治十五年（一八八二）加西郡多加野村河内（現加西市河内町）に生まれた。幼少のころ、法華山一乗寺の任職、東谷実宝師について漢籍を習った。

成人して南宋画に興味を持ち、明治四十四年（一九一一）、松村玉年画伯（鈴木松年門下）に師事、さらに、岡部春里師（田能村直入門下）について研さんした。広く古人諸家の技を学んだが、いたずらにそれにおもねることなく、自身独自の画風の創造を意識して、制作には、剛直の中に雅味を漂わせることにつとめたという。

加西市河内町、広田安爾氏宅に「四君子之図」「寒山拾得図」など多数の画幅や、屏風、短冊などが遺存している。

昭和九年（一九三四）、享年五十三才で歿した。

（図 56・57・58・59 参照）

大 国 隆 正

石見国（現 島根県）津和野藩の人で、寛政四年（一七九二）十一月二十九日に生まれた。はじめ、野之口姓を名乗り、のち、大国姓に改めた。十五才で、国学者平田篤胤の門

に入り、ついで幕府の「昌平校」で古賀精里について国学を学んだ。同校において異彩を放ち、会長に抜てきされた。のち、京都に私塾を開き、門人は数百人におよんだといわれている。

天保七年（一八三六）播磨国小野藩主の招きに応じ、藩校「帰正館」の教頭として藩士の教育に当った。以後、天保十二年（一八四一）小野藩儒の職を辞すまでの五年間、しばしば加西の地に來遊し、国学を伝えた。また、漢詩や、詩歌にもすぐれ、多数の作品が当地に遺存している。

明治四年（一八七二）八月十七日歿。享年八十才。

（図74・75参照）

岡田九茄

画家岡田半江の子として生まれた。生い立ちや画歴は明らかではないが、父半江がしばしば加西郡北条の地を訪れているので、九茄も行をともし、父の門人、青江、石峰などといっしょにたびたび北条へ來遊したと伝えられている。おそらくは、父半江や、祖父（岡田米山人）の薫陶を受け画業に精進したと考えられる。同地の旧家に作品がのこっている。

生年、歿年ともに不明。

（図49・50・51参照）

岡田半江

生地は明らかではないが、天明二年（一七八二）画家岡田米山人の子として生まれた。名は肅、字は子羽、通称を宇左衛門といい、号を半江と称した。

画は父に学び、元、明の諸大家を研究して、米・点・山・水を得意とした。父と同じく津の藩士であったが、四十三才のとき職を辞して大阪に隠棲し、儒者頼山陽、画家田能村竹田や、詩人として名高い篠崎小竹等とも親しく交わった。

「姫路貫名に北条半江」と伝えられるぐらい、半江は、加西の地にかかわりが深く、父米山人、息子九茄と、三代にわたって、加西の地を訪ずれ、当地の文化向上に大きく貢献した。半江はまた、北条の古川氏（信濃屋）の子女を妻に迎え、息子九茄をもうけたと伝えられる。

弘化三年（一八四六）歿。享年六十五才。

（図9・11・46・54参照）

岡田米山人

名は国、字は土彦、通称を彦兵衛といい、米山人と号した。延享元年（一七四四）生れ。生い立ちは明らかではないが、神戸の人、大阪の人、の両説がある。

「播磨奇人伝」によれば、若いころ、「剣坂の庄屋安積喜平次宅に寄寓し、のち同家の乳母を妻とし大阪に出で、同家の援助で米屋を開業。のち藤堂藩に仕へうんぬん……」とあり、早くから播磨国加西郡とゆかりのあったことがうかがえる。

画業は中年以後からはじめたようで、五十才以降の作品が殆どである。米点法を用いた温雅な作品も多いが、むしろ潤達な描線を自由に駆使して、田能村竹田をしていわしめた、「肺腑より出す」との評言のように、すさまじいまでの迫力のある作品にその本領が発揮されているようである。

文政三年（一八二〇）七十五才で没した。

（図10・12・26・53・55参照）

木崎得玄

京都の富豪に生まれ、日々庵と号した。幼少より茶道に興味を持ち、壮年の頃、家督を弟に譲り、表千家七世、如心齋の直門となって、その道を究めた。性格は、富貴に媚びず、貧賤をいとわず、その著「茶話それぞれ草」にも、「茶事の手前よろしきは良しといへども茶の中の枝葉ならん、只ありたきは茶道の源を求めたきものなり」と茶道に対する厳しい心構えを述べている。茶とともに修めた禪の結果であろう。

姫路藩主、酒井候の招きに応じて姫路に赴いたが、藩主が江戸の地で歿せられたために



果さなかった。寛政元年（一七八九）、北条の人、塩田士益、大野士敬、加古文鳳、児島尚善、小畑士進、三枝士厚、三枝士徳に迎えられて師となった。

寛政二年（一七九〇）九月二十七日歿。享年七十五才。北条天神岡に葬る。（図66参照）

田能村 小篁

画家、田能村直入を祖父に、小斎を父に生まれた。通称を真太郎、号を小篁と称した。

祖父、および父に画を習い、大成したが、父、小斎が明治四十二年に死歿したに続いて翌四十三年、三十二才で夭逝した。

直入、小斎、小篁と三代にわたり、しばしば加西の地を訪ずれ、同地の文化に大きく貢献した。その作品は、加西市北条町の旧家などに遺存している。（図61・62参照）

田能村 直入

文化十一年（一八一四）豊後国（現 大分県）竹田の庄屋の子として生まれた。幼名を三宮傳太といい、のち巖と改め、直入のほか、小虎散人、笠翁、青腕、飲茶庵主人等の

号を用いた。

九才の時に田能村竹田の門に入り、その筆才を認められて竹田の義子となった。二十六才の時大阪にいたり、篠崎小竹、大塩平八郎に就学した。直入山樵と号するころから画風が一変し、墨気秀潤なる中に筆鋒の鋭利暢達なる一種の態をもつて縦横の筆をはしらせた。明治初年、京都府立画学校の南宋画の教師に選ばれた。のち別に、南宋画学校をはじめた。

北条の儒者、大野乙山の三男「小齋」を義子とし、また、北条の尾芝氏の子女を後妻に迎えたといわれる。そのような縁故から、北条の地には、しばしば訪れ、「北条八景」、酒見寺に遺存している「五月のぼり」など、加西にゆかりのある作品を多くのこしている。

明治四十年（一九〇七）京都で歿した。享年九十四才。

（図1・2・3・4・5・6・7・8・24・25・47・73参照）

加西文化遺作展実行委員

大野輝雄	柏原邦夫
小林利明	鴨川守夫
甘中和昭	後藤清美
岸本光弘	塩河章子
三枝 勲	鈴木ちゑ
三枝啓助	清水智湖
三枝重雄	高見梅太郎
高橋忠雄	高見清二
時本陽右	竹内たまゑ
内藤節治	玉田 豊
藤原輝二	田中清一
藤原昭三	時本しげの
前田 弘	中谷徹巳
山本辰三	中野節夫
山本武雄	中野一彦
(以上調査編集委員)	西岡忠治
青田賢蔵	深江明可
阿部 勇	松本憲文
岩崎哲郎	山野一郎
大西定男	八木すゑの
岡本国生	(順不同)
岡田盛英	

編集後記

はじめは、洋画の人、二・三人の遺作展計画であったのが、文化各分野の展示へ、さらに、加西の文化に貢献のあった人々を……と話しが發展した。こうして、市文化連盟に「加西文化遺作展実行委員会」が結成され、以来たびたび委員会を重ね、人物調査、遺作品の調査が行なわれた。調査が進むにつれて、せっかくな調査したのだから、本にまとめてみようではないかということになり、この「加西の文化人」の発刊となった。本の名称もなかなか決まらなかったが、結局この標題に「加西の文化を育てた人々」のサブタイトルを付けることに落ち着いた。編集に当って、文体の統一に一番苦慮した。なにしろ古い資料は、文語調であり、調査員も明治から昭和までの中がある。当用漢字、現代仮名遣いに気をつかったが、短かく文をまとめる必要から、一部に文語調が残ってしまったことは残念である。編集の方針は、資料編(写真)と人物編(略歴)とに大別し、前編は、写真鑑賞を中心に、後編は人物を、中学校区別に各五十音順にならべ、最後に、その他の人々数人を加えた。

できるだけ立派な本をつくり、よい遺作展にしたいと考えたが、調査不足もあり、素人のはかなさで不備も多いが、ともかくやった。努力だけでも買って頂ければ幸いです。

(加西市文化連盟・小林利明)

加西の文化人

昭和五十五年五月十五日 発行

企画・編集 加西市文化連盟

発行 加西市文化連盟

加西市教育委員会

印刷 有限会社邦栄堂印刷